

# 映画『嗚呼 満蒙開拓団』に触発されて

——残留日本人と私、そして私たちの人生について——

芳村 晶好

## はじめに

昨年末（22年11月、12月）宝塚、伊丹、両市で幾度か、映画「嗚呼 満蒙開拓団」を観る機会を得る事が出来ました。（ちなみに、宝塚では上映会は市の主催でもありましたが、実務実行部隊は日本語教育に関わるボランティア団体の「日本語の会 ともだち」で私はそのメンバーの1員です）

青年期の昔に親しい友人を亡くしてからか、実務の仕事以外には余り文章を書くことをしなくなった事や、新聞の声欄にすら自分の意見を投稿する事のないこの私が、事もあろうに映画の感想を人様に薦められて書く等という大それた事になってしまいました。その様な状態で、何か人様の眼に触れるものを書こうという事自体がそもそも恥曝<sup>きら</sup>しで、「何を、どれだけ、どの様に書くのか」も解からずこれを書き始めています。

「映画を見ての感想を」と言われましたが、こんな個人的な（日記風？）意味不明の私記が映画の感想文になっているとは到底思えません。素人で書くという力のない事、恥ずかしい限りですが敢えて御了解下さい。

さて、映画が余りにインパクトが強く、冷静に振り返る事が出来ない程強烈でした。感じた事をとりあえず素直に書こうと思いついたのですが、見た直後はこちら側の感受性や感情が沸騰してしまい、冷静な記述や表現が出来ない程混乱している自分に驚きました。記述し終える迄に長い時間との格闘で約50日を必要としました。何故、それほど迄なのかは今もって解かってはおりません。

宝塚では午前と午後に分けて上映をしたのですが200名を超える方に観て頂きました。しかも想像を超える人数の方の感想<sup>アンケート</sup>を頂き、実に75%の150名弱の方の感想と回答率であったと聞きます。（集計は主催者である宝塚市が纏<sup>まと</sup>めましたので感想は手元には無く詳しい中身をご紹介が出来ません。）多くの市民の方が毎回会報で紹介された様な素直な感想即ち「驚き、怒り、悲しみ、」を書かれたようです。また、超御多忙であった筈の中川市長が、わざわざ午前中の予定を割いて自ら来<sup>みずか</sup>られたことと、市内に住まう旧満州からの帰国者の方々へ心温まる暖かいご挨拶を頂いた事実も記して置きます。

## 上映会を立ち上げた人たち

昨年の春先、神戸でこれを見たあるご夫婦の強い意志で我々も、ぜひ宝塚で上映を！の想いがあり、仲間の人達の何人かと「自主上映実行委員会」を立ち上げました。主催は諸氏の協力、努力もあり宝塚市に表に立って頂いたのですが、上映の実行部隊は「中国残留日本人帰国者に日本語を教えるボランティア団体」です。企画から上映までは半年に及び、其々が実務の分担を担い無事に上映に至れた事は、上記の会の皆さんや市関係者の方々の熱

意の結果でもありました。この場をお借りして御礼を申し述べさせていただきます。

先ず、ある方や仲間の人達とは、宝塚で「日本語を学ぶ会」を開いている方々で {{中国残留日本人孤児の帰国者やその家族が兵庫県下でも多数生活をしている事が判明して後、「中国残留孤児を支援する兵庫の会」からでしょうか、さらに話を聞くと、帰国後の国に抛る初動支援事業の最も重要な日本語の基礎教育は、帰国してからの僅か4ヶ月だけであった事、当然それはやらないよりはマシ程度のものであり、日常会話や日本語の基礎がそれで出来るとはどうしても思えず、お話にはならない短い教育期間であったという事情等を聞き、宝塚で<日本語を学ぶ場>を始められた(人達)}} という経緯があります。

<4ヶ月の研修期間では日本語を習得する事は出来るはずがない>その事は中、高、他6年以上の英語教育を受けて来た私達日本人の経験からしても明らかな事実でしょう。帰国時にはすでに人生の大よそ半分を中国で過ごした方であればなおさらです。であるならば、帰国者やその家族がもう一度、日本語の「あいうえお」を基礎から学べる様にと、しかも、その意志さえあれば誰でも無料で学べる場所としての<日本語を学ぶ場>を、退職された後に御夫婦で平成8年2月から始められたそうです。

{それを日本語教室としなかったのは、そうすれば日本で言う「先生と生徒」の上下関係が生まれそうで、横1列で先生も生徒も無く、ずっと人間として同じ高さで学べる関係でありたいと「学びの場の集まり名」を<日本語の会 ともだち>と名付けた経緯があったそうです。私は昨年(春)から週1回、ボランティアの一人としてそこに参加している者です。誕生して3年目の若い「学びの場」で10名からのスタートで今現在は41名が二つのグループ(帰国孤児1世、とその子供達の2世)に分かれて通って来られています。

さて、そう言う「学びの場」が有るも宝塚で中国からの残留帰国孤児達が数多く生活をし、(正確には家族を含めた総数を把握していませんが昨年までは19家族→総人数は1家族4~5人と概算しても100名前後?)さらには、彼らへの行政の生活面での支援や保護等も極手薄で、帰国後、長い間(約20年?)に渡り言わば、お上による「自立を強いられる生活」を余儀なくされていて、皆さん生活が最優先問題。従って日本語の習得などは二の次で、帰国以来与えられた公営の住宅環境の中では「日本語が理解出来ない、話せない、使わない結果の孤立や生活の苦境」は、しごく当然の流れという実態があります。

## 残留日本人の帰国後の生活

熱し易く覚め易い、かつ異文化の人を包む抱擁力の極端に少ない国民性、そういう私達の身近で苦しい生活を続けている残留日本人帰国者の今日の実態や、今回この映画を上映する事で開拓団が組織された歴史的背景、無責任な計画の結末の帰国孤児達の過酷に過ぎる現実を市民の皆さんに一人でも多く知って頂けるのでは、を考えての企画でもありました。市民が知り、忘れず、伝え、かつ彼等への小さな支援の輪が生まれたらという期待があります。

私たちは、一時期マスコミなどで連日報道されていた筈の「中国残留日本人孤児帰国者」が身近に存在し生活をしている事、しかも<何度も祖国に捨てられたと感じる>程の過酷な状況下での生活を今もなお余儀なくされている事等は、ある機会に会の代表の話しを聞く迄は、その事実を何も知りませんでした。

身近に中国残留日本人帰国者の方々がおられた事の驚き。そんな事など、すっかりと忘れていたある種の恥ずかしさ。考える事が有り、お話の後に直ぐく日本語の会 ともだち にボランティアの一員として加わり、春先にそこで企画されたこの映画の自主上映実行委員の一人に私は参加を希望しました。

### 遅すぎた私の歴史認識

戦後生まれで所謂「団塊の世代」でもある私は、旧満州国がかつての日本の軍事的強権に依る傀儡政権国家であったこと等の教科書程度の事は知ってはいました。むしろ、それしか知らなかったし、私の中では昔の事でありそれはとっくに終わったことであったと言う方がより正確なのですが。

私も幼い時から母から叔父がシベリヤで死んだ事を幾度となく聞かされてはいました。戦後65年目で初めて、叔父と旧満州、シベリヤや私がどういう関係であったのかを以下、具体的に識るに至りました。何と遅い歴史認識なのかと今更ながらに思います。

戦後世代の私には、当然の様に旧満州は他の同世代の人達と同様に、教科書の域を1ミリもハミ出す事ではありませんでした。社会に出てから若くして結婚し、20代で三人の父親となつてからは生活を維持していく事にそれこそ無我夢中でした。そして、私の戦争を巡る事情は母、叔父、義父へと話は繋がります。

そんな若造の私を心配した母の事ですが、物心が付いた時からずっと常に母の指には紫色の古びた指輪がはめられていました。洒落たものでなく何故か古い、いびつな指輪でした。震災前に亡くなった母の形見として、今も私の家の何処かにあり、その形や傷だらけの古い石の指輪を、ふと、思うことがあります。

それは、かつて母が自慢していた(神戸)商船大出の叔父が外地で、姉である母にお土産として買い求めた物であり、出兵後にシベリヤで抑留中に死んだその弟の事を、繰り返し幼かった私達兄弟に、自慢の気持を込めて幾度となく「弟の〇〇が生きていれば・・・」の口癖と共にその由来を聞かせていた叔父の、その後に母親の形見ともなった指輪です。

### 開拓団の歴史と自分との繋がり

「嗚呼 満蒙開拓団」の映画の話聞いて、何故なのか不意に私の感覚の何かが反応するものが有りました。映画を観るまでは正直なところ、何故それに自身が拘るのは、よく理解が出来かねていましたが。観た事で、亡き母親を通して、何と整然と開拓団の歴史と叔父や自分の繋がりが、認識出来た事でしょうか。

中国への派兵→満蒙開拓団→ソビエト参戦→敗戦と残留孤児発生→叔父のシベリヤ抑留→叔父の死(死期は不明)→戦後1947、8年私らの誕生→戦後の日本復興→1970年の結婚→日中国交回復→残留孤児の帰国→母の死と叔父の形見→私の定年→(宝塚)「日本語の会」への参加→映画上映と歴史認識→整然とその繋がりの輪が今、理解出来ております。

ざっと、こういう遠い繋がりが私と「中国残留日本人孤児帰国者」の間にあります。加えて私と中国の間にはもう一つの切っても切れない義父との関係があります。

## 中国大陸からやってきた妻の父

詳細は不明も、中国から日本に偶然商売で来ていたらしい義父（29年前に66歳で死亡）は敗戦の大混乱期に中国へ帰国する事が出来なくなり、長年日本での生活を余儀なくされました。後に孤独な死を迎える晩年迄、日本での肩身の狭い、辛い生活を余儀なくされた経緯があり、戦後の大混乱期に日本人の女性と結婚し三人の子供を儲けました。（中国には妻子が居たので二重婚）その長女が現在の私の妻という関係です。義父の中国での詳細は、我々には何故なのか、言わずに（言えずに？）ある日突然亡くなったので、今でも解かりません。

戦後の日本の対中国人への蔑視は到底今の比ではなく、過酷な耐久生活、食料が無かったあの敗戦の後をよくぞ生き抜いて来た上で、家族を養って来たものだ、と驚嘆の思いで義父を見ていました。義父には中国での学歴などは当然の如く有りはせず、それどころか中国では中学にすら行けずに、若くから故郷を離れて働き、青年期(30歳頃)に仕事で日本を訪れていて其の途中で突然、終戦時の大混乱を迎えた様です。

戦後同郷の何人かの仲間達と日本で頑張り通す事で自身の身の置き所を、住まいを神戸に、仕事場を大阪に築きます。女房によると正に爪に火を灯すが如くに極々清貧の生活であったらしく、それでも戦後日本の復興と共に生活を建て直し、三人の子供を日本の大学迄行かせました。それが、「どれ程の頑張りであったのか」は、若く、世間知らずの鈍い私にもおのずと解かりました。清貧で生涯ただ働くことしかなかった勤勉の人でした。

これは、全くの余談であり私事ですが以下に義父の不遇を書きます。それが判らなければ事実の1つが欠落して私にとっての事の全貌が見えては来ませんのでご容赦下さい。

義父の重ねての不遇は敗戦の時期に日本を訪れていた事と重なる、というだけでなく戦後の混乱期をこれから二人で生き抜いて行こうとする自身の日本人の妻にも有った様です。

自分の主人が中国人である事実を金輪際他人にはおろか、本人の指紋押捺の時が来るまで、我が子にすら伝えなかった、という何故か徹底した我が主人に対する「差別の人」であり、幼少の時から終始妻にも「氷の母」でもありました。

国籍を秘す事は、生きて行く上での自己防衛本能であった事は私にも常識的にはよく理解が出来たとしても、どうしても、義母の生き方は到底納得は出来てはいませんでした。

## 私は何じんですか

結婚して初めてそれらの事実(義母の実像)を妻から知らされたのです。

<私は一体何じんですか？> は、又、自分の国籍が日本ではないのだとハッキリと自覚した16歳以降から私と結婚して何年の後に帰化する迄の妻の声でもあるのです。(今でも、何とも表現出来ない痛みとして重く心の奥底にある様です。) やっと文字が解かり始めた子共の頃より、父親の背広の裏に縫い付けられた名前(日常の自分の名とは違う事)から父にも母にも聞いてはならない事が有るのだと、幼い自分にも言い聞かせたと申します。

日本の母親とはそんなものではないと言う、私の狭い経験則や思い込みで、その事を聞いても私には長い間、到底信じられませんでした。彼女が16歳迄は中国籍であることを何一つ母親からは教わることも無く、ある日突然に、母親の言うなりに区役所に連れて行かれ、窓口で始めての指紋押捺なるものをさせられた時の理由も定かではないあの屈辱は、47年

が経った今でも忘れる事は出来ないと言います。(なぜ 16 歳なのか・・・当時の外国人登録は義務教育迄の子供は親が国に届けるだけで良かったのかも知れず、それ以降の年齢に達した者は自分で役所での指紋押捺の必要があった為ではないでしょうか。昭和 39 年前後の外国人登録法の詳細を知りません。)

そんな母を持つ当時 16 歳の彼女に対する区役所窓口の受付女性の、人を見下した様な高飛車な言葉と侮辱の視線、顔が真っ赤になる理解不能の屈辱に思春期の女房は涙を抑えられなかったと言います。当時のそんな状況や、母親から愛情のカケラすら受けて来なかった彼女の深い心の傷など到底埋める事は、22 歳で始めて出会った私には若くもあり、世間を広く知る事も無い若輩で、それをカバー出来る力量は遥かに超えていました。

では何故、義母がそれ程迄に「侮蔑の対象でしかない義父と所帯を持つに至った」のか？今となっては全く私の想像でしかないのですが、戦後の餓えの混乱期を乗り切る為に、義母は多少の小金を持っていたのであろう中国人の義父に結婚をする事で我が身を売ったのだと、今にして思います。それは敗戦直後の帰国の大混乱期に日本の婦女子が、自分を中国人婦人となる事で、経済的に自分と家族を救った当時の残留婦人の日本版そのものではなかったのではないのでしょうか。

<そうとでも考えないと、映画の様に冷酷無比の当時の義母の実像は理解不能なのです。>

当時義母は軍人であった父を亡くし、母と自身を含めた 4 人の女だけの家族。頼るべき男手は誰一人無しの家庭状況であった筈でした。

### 義父の人生とは・・・

義父も生きる為には日本の事情に通じる女性である義母を生活手段として必要であった様です。事情と国籍の違う二人の現実を生きる必要手段が符合したのだと。その時期には男女間の愛情等よりも生き延びてゆく事の現実的手段こそが生活の最優先順位であった筈。必要なのは先ず、お互いが生きて行く為の言葉と金と衣、食、住だと。

戦後多少なりとも主人が商売に成功する様になり生活が少し安定して来ると義母の関心は見栄であり、世間体が一番の関心事となります。己の<良妻賢母度ゼロ>の家庭内でも、自分への反抗で顔に泥を塗った娘の心の痛み等は、何処吹く風であった様でした。そのツケは後年、義父が 66 歳の時に当然の如くに彼の唐突の病死として現れます。

いつもは朝早く一番に店のシャッターを開けて従業員を迎える義父がシャッターを開けることがなく、連休明けの従業員に、2 階の台所の出っ放しの湯沸かし器の下で小さく青黒く変色し、冷たくなり発見される迄は誰にも何日も気付かれることはありませんでした。

心筋梗塞等が原因での急死だったらしく不審死として解剖へ廻され、当然の如く警官による取り調べがあり「妻であるあなたは、どうして何日も異変に気付かなかったのですか？考えられないが！」と刑事に詰め寄せられたらしいのです。いや、義母の事等より義父の変わり果てた最後の姿を見た(検視させられた)女房のショックは想像を超えていた様です。病死ではあるが事実上はこの母親が父を死に追いやったのだと強く思ったと。

義母は主人の仕事場(自営業)には一切出向く事などは無く、行く時は生活にお金が入るのみであり、身の周りの何一つ世話を焼くでもない<女房業放棄>の典型的母親であっ

たと聞きます。戦後の日本で何一つ人間らしい、ささやかな幸せのひと時も過ごす事は無く、突然死する迄、終始働きづめでした。しかも家族からも孤立を強いられていた義父の孤独は、中国で置き去りにされた日本人達そのままであり、日本版残留中国人そのものであって、残留日本人の真逆を生きた人であったと思います。戦争という当時は不可抗力の巨大な歴史の歯車に翻弄されて終わった義父の幸薄い生涯。

唯一、戦後の義父に味方した事は、そういう状況に置かれた時の年齢が幸いにも充分な大人であった事でしょうか。だから義父は生き延びる事が出来たと。共通点は中国と日本で、お互いに日常その国籍を伏しても、生きていく為にそれを（知ってはいても）隠さざるを得なかった過酷な人生であったのだと思います。

義父は自分の国籍には、（寡黙の人で、言葉にはしませんでしたが）確とした誇りが心の中に有ったのだと感じられます。戦後 35 年も日本で生活をして来たにも関わらず、必要最小限の日本語しか私は聞いた事はありません。それも訛りの強い中国式独学日本語。それは「話せないのでは無く、話さなかった」のでは。

日本語を話す事が中国籍である事の誇りに対する裏切りにすら思っていた節があります。義父の偶の楽しみは同郷の幾人かの仲間との語らいと、寝る前のラジオから聞こえる北京放送であったと聞いておりました。

遙か遠くから聞こえて来る、故国中国からの、懐かしい声や京劇独特の鐘や節回しの音楽など。義父が自らの アイデンティティ 出 自 に拘っていた対極で妻も「私は何じんですか」に以降苦悩することになります。

義父は国では貧しくて学校には小学校程度しか行けなかった様ですが、兎も角、頭の良い人であったことに間違いはありませんでした。国では貧しくて金で頼まれて入試を代わりパスさせたこともあり、商売で日本に来てソロバンや商売の帳面は間違った事は無く経理は完璧であったようです。

### 私にできることは・・・

しかし、戦後は我々自身にとっても遠く、65 年以上の昔、さらにそこ迄に至るまでの歴史を我が身に関連付けて振り返る事などは日常の関心事以外に他なりませんでした。

お互いの我等夫婦の身の拠って立つゆえん 所以や、その後の人生に深い洞察があれば、それがどれ程の関わりを持って迫る事か、改めて無関心であった事に大きな後悔を感じます。これこそを<若気の至り>と言うのでしょうか。

帰国者の人生や義父の人生と我々の人生はほんの紙一重の違いでしかありません。たまたま残留孤児達は偶然にも某開拓団の一家の一人として、そこで生まれたに過ぎないでしょう。それは、人の時と場所との偶然が只、そうさせたに過ぎず、あれは私の人生であったのかも知れないと強く深く感じています。偶然がそうさせたのならば今、ここにあり苦痛を強いられている帰国残留孤児達を現実的に救い得る具体策は何があるのでしょうか？

それも、（力のない市井の市民が出来る小さな支援とは？）行政に期待出来る事が極小であるとすれば、唯一の現実的支援策は彼らが今最も必要としているもの。それこそは生活手段としての「日本語」でしょう。「日本語」をしっかりと学んでもらう、お手伝いを我々

がこの先、細くても長く続ける事ではないでしょうか。

日本語や話し言葉こそは、生活をしていく基本であり、隣人とコミュニケーションをとり、行政と必要な書類をやり取りするのには必ず必要です。病院で体調の不具合を自分の言葉で伝える事などが出来る唯一で最良の武器となる、私はそう考えて宝塚の＜日本語の会＞でお手伝いをさせて頂いています。

私には資格、学歴、経済力、共にありませんがボランティアには幸いにもそのどれもが不要です。必要な事はやはり「同じ高さで寄り添うこと」なのかも知れません。しかし、時折この発想自体が上から目線の姿勢で傲慢<sup>ごうまん</sup>ではないのかと考えたりするのですが、想像を絶する過酷な体験を経ての方々<sup>めろ</sup>に比べて我々の方が遥かに生温い人生であった筈で、全てがそんなに簡単に行く筈もなく、余り焦ることなくユックリと支援活動（日本語の会 ともだち）を継続させるべきなのだと思います。

帰国者の方々の詳しい個人の内情は知りませんが、徐々に解かってきた事、それは人により事情が千差万別であり、Aさんなどは中国にいらした時は相当な知識階級であって、当然の事ながら歳相応社会一般の知識や常識を身に付けられている。そんな方は少なからず居られます。かと、思うと「あいうえを」の初歩から教えなければならない方も居られる。

そんな状況に即応しなければならない事が有る等、その方の「今の現状」を察せねばという、私が近づいてゆき帰国者の方に当方で学ばねばいけない事の方が何と多い事でしょう。所謂、知識階級であった筈のその方たちなどはその方なりの苦しみをジレンマとして背負われているのだろうと言う、要は個人差こそあれ、日本語が出来ない事のモドカシさ（物事を正確に伝えられない事に起因するイライラ感等）に苦しんでおられる現況がある様です。

### 「帰国してよかった」と言えるには

中国は漢字の国でもあり Aさん等は高卒程度の私の漢字の知識では到底追いつかない程の漢字認識力で、当方の「薄識<sup>はくしき</sup>」に赤面する程の知識が有りながらです。習う教科書の漢字読みは、80点ラインで書き取り等は先ずはクリアー。細かな表現や表記に難はあるけれど、概ね優れた学習能力だと思います。濁音や日本語表現に難がある（全員に共通）程度で、日常生活には余り困らないのかな？と思う程です。

新聞などは漢字を手掛かりに大よその事は理解が可能であり、あくまで日本語のテニヲハでの表現の繋がりが自身の経験の深さとはピタリとは符合しなくて、記事を鮮明に理解出来ないのが現状だと思われま。ある種の隔靴搔痒<sup>かつかさうよう</sup>。

日本語教育に関するアマチュアですらない私は、一人ひとりの理解度が全く違う事態に対面すると、私が中国語が出来ないこともあり、その方の理解度が今どの段階にあるのかが即断には掴めず、教え方に自信などは持てないでおります。改めて日本語も知識の非力を感じます。しかし、教科書のたった1単語の正解を見つけるとその進展ぶり以上の喜びがこちら側にも生まれる事に感激する事も度々です。そんな笑顔こそ何よりの希望です。

帰国された方々に、＜帰国して良かった＞と思って頂けるのには、今の現状は遥かに遠いのだと断言出来ます。何より行政の支援の現実的乏しさ。殊に生活支援に対する何と言う酷な救済。日本語教育の無さ加減。敗戦時に幼少であった方も今は（70歳前後）孫のいる世

代にすらなりつつあります。人生の途上での帰国結果は本人のみならず 2,3 世にもその影響は大きく、言葉だけでなく生活上の深刻な影響が出始めているようです。

2 世以降の世代への支援などは、入国して来た時からでも一切ないのが現状だとか。

残留日本人孤児帰国者の 1 世は延べ 2 千人強（不正確）らしいですが今日不況下にある日本とは言え、その程度の方々や家族が何故、救われることも無く再び放置されねばならないのか、現代日本の貧しい政治状況には大きな失望と怒りを覚えます。

この国は何時の時代も国民の事は必要な時ほど救いはしない。

## 忘れてはいけない歴史的現実

国家と国民の溝の深さは 65 年前と変わる事などは無かったのでしょうか。国民の多少の生活の向上はあったとしても社会的弱者を掬い(救い)取る政治状況は未だに我々は持ち得てはいません。明日の我身がどうして「そうなりはしない」と断言ができるのでしょうか。弱い者こそ国は一番に切り捨てて行く政治と現実。

過ちであった嘗てを違った形で再現する事はいとも容易です。今救い取らねばならない層の人達を支援しながら、明日の我が身、我が子、我が孫の為にこそ、この手で確かな支援を作り上げていく事が望まれています。「映像に在った昨日の彼らこそ、明日の自分である」の想像力こそが今必要なのだと あの悲惨の記録 を見て理解をさせて頂きました。

映画を見たその後、偶然 TV に 87 歳の老婦人が手作りで手書きの粗末なプラカードを首から下げて「憲法 9 条を守れ」「男達を二度と戦場に送るな」とのみ、東京のど真ん中で、訴えかける映像が写されていました。何とシンプルで政治色等のカケラも匂わさない強烈な訴えであったことでしょう。

私の中では神宮外苑を学徒動員の為に行進していく若い学生達の映像が重なります。櫛を飛ばす当時の首相の顔。ああ、こいつが目の前で捧げ銃をしながら行進していく若い命を戦場で補給のひとカケラも無く犬死をさせた T だと、あの映像を見せられる度に怒りと共に思い起こします。

道行く人々の大半は老いた御婦人の「男達を二度と戦争にやるな」や「殺すな」の叫びには今という時代とのギャップを感じてでしょう、耳を傾ける素振りすら見せません。

偶然でしょう、通りがかった初老の男性からの心からのカンパに対してそれを受け取る気配も無く、只々「今の世が戦争の準備をしようとしているから止めて下さいね、胸に置いておいて下さいね」との素朴極まりのない、白髪の婦人の訴えにこそ、心底からの反戦魂が見えました。心の中であの老婦人との深い連帯意識を感じながら『嗚呼 満蒙開拓団』の準備をし、人を集め、上映し、終了し、多少なりの反響を得た事に何がしかの充足を感じています。あの戦争で若くして実に虫けらの様に国家の為に死んでいった無念の方々。

国策の為とは言え、遠い満州の凍て付いた大地で今も眠る何十万人もの人達に深い哀悼の気持を捧げます。それは私の父であり母であり兄姉であり、時代が変わればあれは私であったのかも知れないのですから。

私は戦後と称される時代に四国の田舎で 8 人兄姉の末弟として生を受け、幸運にも人様に

助けられ生かされて来ました。そして今、三人の可愛い幼い孫がおりますが、彼らを一体どうして凍て付いたあの満州の荒野に捨て置く事が出来るでしょうか！

凍りつく川へ投げ捨てる事が出来るでしょうか！

戦争の時代と言う歴史の不運を、子や孫の身の上の事としない為に、金輪際忘れはしません。

## 方正日本人公墓

開拓団の悲惨は何よりも明日の我等であるとの想像力こそが、私達自身を救う<武器>にもなるはずです。

忘れられようとしている65年前の歴史を今一度思い起こし、記憶から消えようとしている事を、今出来る事で伝えねばと思います。映画を創られた羽田澄子監督の御努力や関係者の限らない奮闘に深い敬意を表します。

## 安らかに眠れ

帰国途上で中国東北部の寒酷の土に無念にも倒れ、方正日本人公墓に眠る幾千の人々よ、今訪れる人もなく、いずこかの大地に朽ち果てた数多くの御霊よ、戦争と言う巨大な歯車に挿り潰された名も無き幾十万の方々よ、無念の亡骸達よ、何よりも安らかなれ。

あなた方に一瞬でも良い、<幸せだった>という、そんな瞬間が人生の中に何度あったのでしょうか。

乳を求め泣き叫んだ幼子よ！ 与えてやれなかった無念の母よ！ 老いた弱き人々よ！ 慟哭の兵士達よ！

偶然が選んだ不運に押し潰される昨日まで生きていたあなた方よ！

せめて、8月9日の敗走以前には幾度となく、そんな束の間の時間があったのだという事を切に願います。

弱い被害者であると同時に、貴国で侵略し、奪い、殺しまでした、残虐な加害者でもあった近年の歴史を私達は深く人間の悔恨として心に刻みます。

最後に、その様な敵国日本人の為に墓を作り、長く守り通してくれた中国の民の懐の大きさと深さに限りなく感謝しつつ、合掌。南無大師遍照金剛。

(よしむら・まさあき：1947年生れ。2010年11月兵庫県宝塚市で開催された『嗚呼 満蒙開拓団』上映会実行委員。宝塚 <日本語の会 ともだち> ボランティア・スタッフ)